

〔戦国時代、小田原城を本拠に関東一円を支配した戦国大名〕

北条五代

逸話集



Hojo Godai Anecdotes

北条五代とは

戦国時代、小田原を本拠に関東一円を支配した戦国大名が北条氏(後北条氏)です。歴代当主五人は「北条五代」と呼ばれています。下剋上の戦国時代、周辺の大名と激しく争いながらも、領域を広げ、内政面でも見事な手腕を発揮してきました。北条五代の各当主は理想国家を実現するため、小田原城を戦国時代の堅城にすると同時に、国としての秩序を重んじ、まちづくりにも心血を注ぎました。北条五代の統治は実に100年近くに及び、その間、歴代を通して善政を敷き、領民を大切にす領国経営を徹底しました。

北条五代観光推進協議会

戦国の世にあって親兄弟争うことなく五代約百年にわたり関東を治めた北条氏にゆかりのある12市2町(井原市、大阪狭山市、沼津市、三島市、伊豆市、伊豆の国市、横浜市、相模原市、鎌倉市、小田原市、箱根町、八王子市、川崎市、寄居町)の行政及び観光協会が連携し、北条氏のさまざまな偉業や魅力を活用した観光事業を展開することにより、北条氏ゆかりの地として歴史や文化を広く全国に紹介し、地域の活性化を図ることを目的としています。

北条五代観光推進協議会の公式アカウント



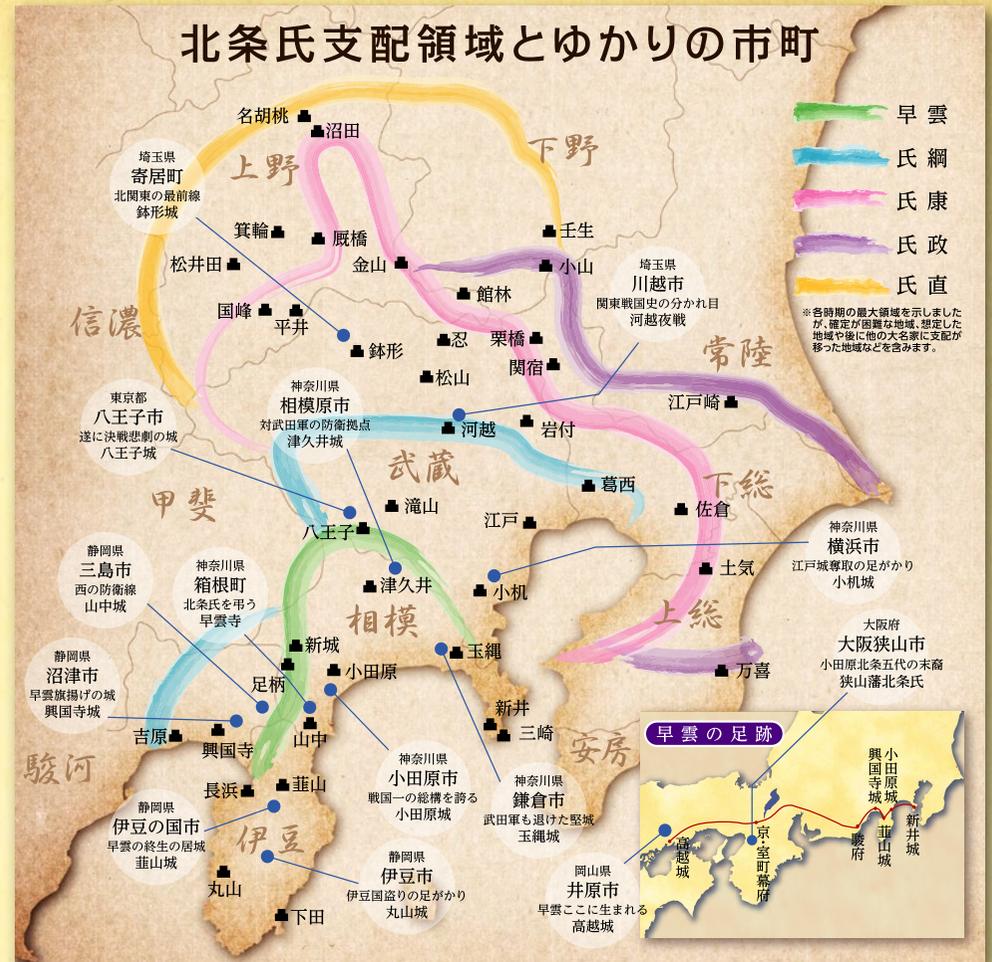
Facebook
日々の出来事を発信!
@5hojo



ホームページ
大河ドラマ化への
取組みなどご紹介



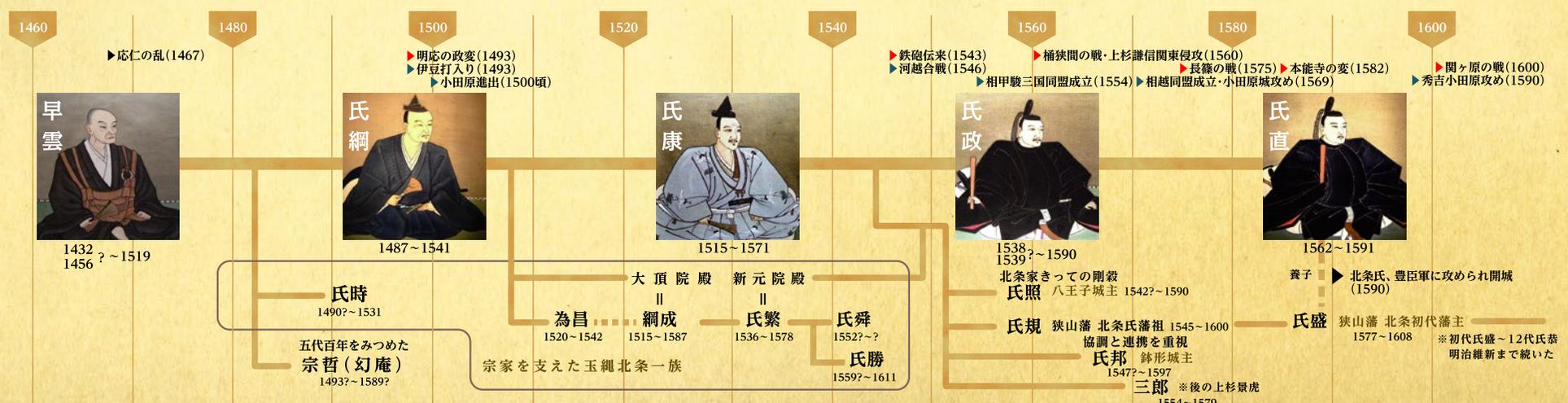
Instagram
名所やイベント
風景などアップ中
@hojogodai



※各時期の最大領域を示しました。確定が困難な地域、想定した地域や後に他の大名家に支配が移った地域などを含まず。



理想国家づくりを目指した北条一族
皆が平和に暮らせる
北条氏の系譜



初代 戦国の魁

北条早雲

ほうじょうそう'un (伊勢宗瑞)

【1432-1456?~1519】

伊勢宗瑞(後の初代早雲)は備中在原莊(岡山県井原市)を知行していた備中伊勢氏の出身です。伊勢盛時と名乗り幕府に出仕していました。長享元年(1487)以降は駿河(静岡県)の大名今川氏に仕え、明応2年(1493)には、將軍足利義政の甥の茶々丸を堀越御所から追い伊豆(静岡県)へ進出します。伊豆一国を治める戦国大名となった早雲は、元龜元年(1501)に相模小田原(神奈川県小田原市)へ進出し、その後相模一国を平定します。領国経営でも優れており、他の大名に先駆けて検地や減税政策の四公六民などの改革を行い、以後五代約百年にわたり北条の時代の礎を築きました。



◆ 伊豆市

伊豆侵攻に抵抗した
狩野氏の本拠地

史実



狩野氏は、平安時代末期からの山城で伊豆国の豪族である狩野氏の本拠地。初代早雲の伊豆侵攻の際には、狩野道一が最後まで抵抗したが、足利茶々丸の自害を受け、降伏したと考えられる。その後、狩野氏一族は「旧豪族は地縁から切り離す」という早雲の政策により、小田原をはじめとする関東へ移されたが、小田原評定衆の中にも加わっていることから、狩野氏が北条家家臣の中核でも活躍していたことがうかがえる。

根拠文献:小田原衆所領役帳

大見三人衆の居城

伝承



大見城は、平安時代末期に大見平三家政もしくは成家により築城されたといわれている。初代早雲が伊豆侵攻の際には、大見郷の地侍「佐藤藤左衛門尉行広、梅原六郎左衛門尉宣貞、佐藤七郎左衛門尉」の3人を寄親とした「大見三人衆」が大見城に籠城したことや、柏久保城での活躍で、早雲を助けたことから、後に賞されている。

根拠文献:「豆州志稿」、「北条五代記」、「大見三人衆由緒書」

◆ 伊豆の国市

史実

早雲の伊豆進攻
(堀越御所攻め)



明応2年(1493)、北条早雲は伊豆韮山にある堀越御所を攻め、堀越公方である足利茶々丸を追い出した。発掘調査では、御所のものと思われる東西約100mの池跡や、戦禍に伴い焼かれたと思われる土塀の破片が見つかっている。拠点を失った茶々丸は伊豆半島や関東各地を転々としてつ早雲と合戦を繰り返したが、明応7年(1498)に下田の深根城で捕らえられ、自害したとされている。

根拠文献:「韮山町史」第10巻、奔る雲のごとく、発掘調査

早雲の
韮山城築城



堀越御所を攻め落とした早雲は御所から約1km離れた東側に位置する龍城山に韮山城を築き、自らの本拠地とした。これ以後、早雲は韮山城を拠点として伊豆平定・相模侵攻を実施し、北条五代繁栄の基礎を築いていく。韮山城跡の麓の発掘調査では、戦国時代の建物跡や池跡が見つかっている。

根拠文献:「韮山町史」第10巻、奔る雲のごとく、発掘調査

◆ 鎌倉市

北条早雲と
玉縄城

史実



現在、清泉女学院となっているところが、「城山」と呼ばれた玉縄城址の中心地である。玉縄城は、初代早雲が永正9年(1512)に小田原城の支城として、相模・三浦をおさえるために築城した山城である。早雲はこの城を築くことで三浦道寸を攻め滅ぼし、この辺り一帯を治めることができた。その後、玉縄城主は次の略路図のとおり引き継がれていったといわれている。北条早雲一氏時一為昌一綱成一氏繁一氏舜一氏勝

根拠文献:鎌倉市教育委員会「かまくら子ども風土記」

◆ 相模原市

早雲の制札が2つも残る
相模原市の当麻

史実



相模原市南区当麻には、貴重な史料である早雲の制札が2つも残っている。この2つの制札は、早雲が自軍の乱暴狼藉の禁止を保障したものである。永正9年(1512)の制札は相模北部が北条家の統治下に入ったことを示し、また、永正15年(1518)の制札は早雲最晩年に近いもので、いずれも貴重な史料である。当麻は当時、時宗の大寺院無量光寺の門前町で六斎市が開かれ、相模川の渡し場もある、武蔵に通じる交通の要衝であった。

根拠文献:「相模原市史」第1巻・第5巻他

◆ 井原市

伝承

早雲が寄進した
「摺り袈裟」の版木



室町時代前期に五郎大夫なるものが急死した折、十王から触れれば三悪道で苦を受ける者も皆解脱するという袈裟をもらい受け、甦った。そこで五郎はこの袈裟を版木にし、伊豆の修禅寺へ寄進した。後に初代早雲が修禅寺より譲り受け、青年期までを過ごした荏原庄にある菩提寺、法泉寺に寄進した。法泉寺には高越城主、伊勢新左衛門盛定(早雲の父)等祖先の菩提が弔われている。

根拠文献:「井原市の文化財」井原市教育委員会2009
井原市法泉寺に伝わる「十王袈裟記」

南北朝の
合戦の場
「高越城跡」

伝承



鎌倉時代の蒙古襲来の際に築城されたと伝えられ、南北朝の合戦の場になり、戦国時代には伊勢氏の居城となった。伊勢新九郎盛時(後の北条早雲)は、備中伊勢氏出身といわれ、青年時代にこの城で過ごしたと伝えられている。本丸を含めて3段の郭で構成され、堀切も残っており、現在も当時の状況をとどめている。

根拠文献:「井原市の文化財」井原市教育委員会2009

二代 関東支配の礎を築く 北条氏綱

ほうじょううじつな【1487~1541】

二代氏綱は小田原進出後伊豆韮山城に止まった早雲に代わり、小田原城に入ったと見られています。早雲没後本城を小田原城に移し、伊勢から北条への改姓、虎朱印状の創出など、北条氏の基盤を整備した人物です。また、領国を武蔵(東京都・埼玉県)、駿河、下総(千葉県の一部)にまで拡大、鶴岡八幡宮を造営するなどし、東国の盟主としての地位を確立しました。



◆ 箱根町 時流に翻弄された菩提寺(早雲寺) 史実



大永元年(1521)に創建された早雲寺は以後北条氏の菩提寺として、また、臨済宗大徳寺派の禪刹として、戦国時代を通じて関東屈指の規模を誇った。しかし、秀吉の小田原征伐の際には、秀吉より本陣が置かれ、その後本陣を石垣山城に移す際に火が放たれ、貴重な寺宝の大半もろとも灰燼に帰し、廃寺同然となった。江戸時代に入ると、北条氏の家督を継いだ狭山北条氏や小田原城主稲葉氏の尽力もあり、再興を果たした。東海道に面していたこともあり、朝鮮通信使が江戸へ向かう途中に立ち寄りなど、多くの旅人が訪れる名刹として知られることとなった。

根拠文献:かなしんブックス「早雲寺」早雲寺史研究会著

◆ 鎌倉市 玉縄城主北条氏時と円光寺 史実

円光寺は、城護山明王院^{じょうござんみょうおういん}といって、もとは初代玉縄城主の北条氏時が澄範^{じやうはん}という僧を招いて建てた寺である。玉縄城主が城中や城下の平和をお祈りする祈願所として続いたが、元和5年(1619)に玉縄城が廃城となってからは、現在の場所に移されたという。また、玉縄城跡の南の方には、円光寺曲輪^{くわわ}という名が残っている。

根拠文献:「豆州志稿」、「北条五代記」、「大見三人衆由緒書」

◆ 浜の大鳥居跡 史実

鶴岡八幡宮の供僧であった快元^{かいげん}が書いた「快元僧都記」には、天文4年(1535)に、三代氏康の父である二代氏綱の時に鳥居再建の願いが出され、建替えを定めた、とされる記載がある。その後、上総(今の千葉県)で切り出した大木を海路で運搬し、17年の歳月をかけ、やっと完成したようで、その時には盛大な儀式が行われたそうである。

根拠文献:鎌倉市教育委員会「かまくら子ども風土記」

◆ 小田原市

蓮池弁財天 伝承



大永2年(1522)北条氏綱が江の島の弁才天を武運と住民の繁栄を願って勧請したのが起こりといわれ、小田原城の鬼門(北東)の守護に祀ったとされる。当時の蓮池は広い水面が広がり、その中島に弁財天を祀る祠が建てられていたという。江の島の弁才天は、源頼朝が武運の神として信仰し、北条時政は祈願で籠り、龍の三ツ鱗を授けられたことから家紋としたと伝わる。小田原北条氏もそれに倣い三ツ鱗を家紋として弁財天を信仰したという。現在の位置には戦後に遷座した。

根拠文献:蓮池弁財天記ほか

虎の印判 史実



虎の印判は、五代氏直に至るまで用いられた小田原北条氏歴代当主の印である。「禄寿応穩」という印文の上に虎の姿が配されており、「虎之御印判」と呼称した。この「虎之御印判」により、直接民衆へ下命するため、「虎之御印判」が無ければ、郡代・代官の花押が押された文書でも従う必要はないと宣言した。これにより、北条氏の意図による領国支配体制を郷村の隅々にまで浸透させることができるようになった。虎の印判状は、小田原城天守閣の展示でみることができる。

根拠文献:小田原市史ほか

◆ 横浜市 小机城代・笠原氏の菩提寺 臥龍山雲松院 史実

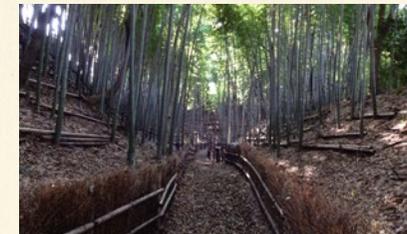


小机城初代城代笠原信為が伊勢宗瑞と父・信隆の菩提を弔うために建立したとされる笠原氏の菩提寺で、創建は大永年間(1521-28)と推測。

一説にはもと神大寺村(神奈川県)にあり、開山をつとめた天叟順喙^{てんそうじゆんくわい}が後に現地に移転したという。境内には笠原氏歴代の墓があり、享祿2年(1529)に笠原信為が熊野堂5貫文分の土地を「早雲寺殿御茶湯分」(伊勢宗瑞の供養料)に寄付したことを示す古文書その他を蔵している。

根拠文献:「港北区史」(港北区郷土史編さん刊行委員会、1986年)

◆ 小机領の支配拠点 小机城 史実



室町時代の長尾景春の乱で蜂起した勢力を太田道灌が攻撃した記録に初めて小机城が登場する。大永4年(1524)北条氏綱の江戸城攻略では前線基地となり、城代に笠原信為が入った。当初小机地域は玉縄城の管轄だったが、その後小机領として独立し、城主には宗哲の息子・三郎が就いた。以後小机領の支配拠点となり、戦国末期には領国内の70歳以下の成人男性を戦闘員に登録するため小机城に集めている。

根拠文献:「港北区史」(港北区郷土史編さん刊行委員会、1986年)、
「神奈川県史」(神奈川県、1981年)ほか

三代 文武両道の名将 北条氏康

ほうじょううじやす [1515~1571]

三代氏康は氏綱の死後家督を継承し、大規模な検地を行い、税制改正を実施し、更に家臣の軍役などの役負担を把握し台帳を整備するなど、領国支配の体制を本格的に整えたことで知られています。天文15年(1546)には氏康の名を著名にした河越合戦に勝利することで、山内・扇谷の両上杉氏を関東から排除し、その勢力範囲は上野(群馬県)に拡大しました。



◆ 三島市

西の防衛線 山中城築城と氏康

史実



山中城は三代氏康により、永禄年間(1558~1570)に築かれた。箱根外輪山西側の尾根筋を通る箱根路を城内に取り込み、曲輪の周囲には障子堀などの特殊な空堀を巡らせ、街道を監視・封鎖する関所的機能を持つ最重要拠点の城塞であった。三島市は1973年から発掘調査を行い、北条流築城技術による障子堀などの上面には遺構保護のための盛土をし、芝生を張る工法により復元整備を行った。

根拠文献:「ふるさと三島」、「三島小誌四」、「三島の昔話」

そうかんじ

宗関寺
(三島市山中新田)の墓所

史実



開基は北条氏家臣の間宮康俊の娘 お久(山中城の戦いの後に徳川家康の侍女になる)で、戦死した北条方の将 松田康長、副将 間宮康俊一族、上野箕輪城主の多米長定などを供養するために家康に建立してもらった。後に豊田方武将 一柳直末の墓が菅原新田からこの地に移され、現在は敵味方の墓が並んでいる。

根拠文献:三島市誌 下巻

◆ 川越市

河越夜戦

伝承



根拠文献:川越素麺

かつて東明寺の境内地内であった塚を宝永年間(1704~11)に崩したところ嚮體が300~400程掘出されたことから天文年間(1532~55)の古戦場に間違いのないもの。

河越夜戦と謎の美少女の正体

伝承

河越夜戦のおり、長い黒髪をはためかせ、艶やかな化粧をした美少女が、河越城を何重にも包囲する両上杉連合軍のど真ん中を単騎で突っ切っていった。突然の美少女の登場に、連合軍は唖然とする他ない。美少女の正体は河越城に籠城する北条綱成の美弟、福島弁千代(北条綱房)。北条氏康に河越城への使者として志願し、自らの美貌を駆使し、見事全うしたのだった。

根拠文献:関八州古戦録

◆ 小田原市

氏康の狐伝説が残る北條稲荷

伝承



北条氏康の勧請と伝える神社。氏康には和歌の力で城内の老狐を調伏したとの伝説があり、その狐を祀った社は、はじめは城内にあったが、後に現在の場所に移し、北條稲荷の名がつけられたという。また、社前には、蛙の形をした巨大な蛙石明神と呼ばれる自然石がある。もとは小田原城中にあったが、氏康が寄進。小田原に異変がある時に鳴いて予告したという伝説が残っており、特に天正18年(1590)の小田原落城の際は、夜な夜な盛んに鳴いたと伝わる。

根拠文献:北条五代記ほか

◆ 相模原市

さいかちの木と勝坂地名伝承

伝承

~永禄12年の信玄の小田原攻め~



北条家と手切れとなった武田家は永禄12年(1569)に小田原城を攻めるため、上野国、武蔵国を通り相模原市域に入った。相模原市南区当麻にはその際に、先勝祝いとして植えたと言われる「さいかちの木」が現在も残されている。また、その南方の南区磯部内の「勝坂」は、信玄が勝どきをあげた坂との伝承が伝えられている。

根拠文献:「相模原市史」第1巻

浅間森塚・首洗い池伝承が残る

伝承

三増合戦後の武田軍の甲斐への帰路



相模原市緑区寸沢風には、三増合戦からの甲斐への帰路、武田勢が合戦で討ち取った北条家家臣の首実検を行うため、その首を洗った「首洗い池」、首を埋葬した首塚である「浅間森塚」という伝承地が今も残る。塚には北条家家臣3269名を埋葬したとされ、「浅間森塚」周辺には3~4つの塚があったとされる。

根拠文献:「郷土さがみこ 地名編」

四代 北条氏政

まじめ実直な
慎重派

ほうじょううじまさ [1538~1590]

四代氏政は氏康存命中の永禄3年(1560)に家督を継承しています。永禄4年(1561)の上杉謙信、永禄12年(1569)の武田信玄による小田原攻めを退けています。氏直に家督を譲った後も、北条氏の最高実力者として君臨しますが、天正18年(1590)の豊臣秀吉による小田原攻めの敗北により切腹しています。



◆ 沼津市

はが 拵和伊予守興国寺城で奮戦

史実



武田信玄の「深沢城矢文」で有名な武田軍の深沢城攻囲戦の際に、武田軍の一部が南下して、興国寺城を攻めた。このとき北条氏の家臣拵和伊予守氏統が興国寺城将として奮戦し、敵(武田氏)五十余人を討ち取り、四代氏政から感状をもらったとされる。

根拠文献:北条氏政感状写(拵和氏古文書)

長浜城の普請と駿河湾海戦

史実



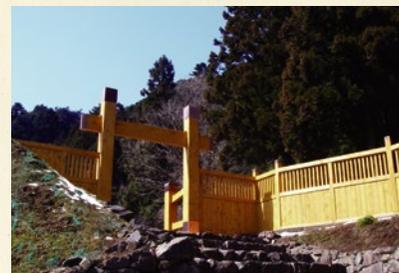
北条氏は、武田勝頼が普請した三枚橋城に対抗して、長浜城を普請し、水軍の大將である梶原備前守をおいた。海上では、両水軍による海戦が行われるようになった。そうした中の天正8年(1580)3月15日武田の軍船5隻が長浜城に攻め寄せたことにより、大きな海戦が始まった。

根拠文献:北条氏光印判状(植松文書)、小浜家文書の勝頼感状 武徳編年集成などの江戸時代の戦記物の他

◆ 八王子市

氏照の築城技術

史実



滝山城・八王子城の曲輪の巧緻に発達した縄張り、北条氏の高度な築城技術をうかがわせる。氏照は、兄、氏政から「陣庭の取り様肝要に候。おおかた陸奥守陣取りの模様取るべし」といわれており、「陣取り」は氏照を見習えといわれる程の戦上手であった。陣取りは単に陣の配置ではなく、陣地の構築、すなわち簡易的な築城を指している。滝山城・八王子城の見事な陣取りは、こうした氏照が抱えていたであろう技術者集団の築城術の優秀さを実感させる。

根拠文献:八王子市史

八王子城跡
御主殿跡の出土遺物

史実



八王子城跡の出土遺物は、明から輸入された染付(青花)片が最も多く、ほかに舶載の白磁・青磁片、国内の瀬戸・美濃窯系天目碗や常滑産水甕などの破片も数多く発見された。また、ベネチア産レースガラスの破片は今のところ国内唯一の出土例で、このガラス器の存在は北条氏の文化程度の高さをうかがわせる。

根拠文献:八王子市史

北条氏照と武田勝頼の鍵合わせ

伝承

永禄12年(1569)、武田信玄は北条領に進軍し、小田原へ向かう途中、氏照の居城滝山城(八王子市)を攻撃した。その際、氏照は二の丸で自ら鍵をとり防戦、武田勝頼と鍵を合わせたという。氏照の居城滝山城は、昭和26年に国指定史跡に指定されている。近年では、平成29年に続日本100名城にも選定され、歴史的な魅力の深さが再評価されている。また、令和3年(2021)に、築城500年の節目を迎える。

根拠文献:北条五代外伝

◆ 寄居町

稚児岩(ちごいわ)

伝承



北条氏政の小姓が、氏政夫人の腰元である錦姫と恋仲になった。氏政夫妻は規律を重んじて、両名を氏邦に預けた。つる恋心を抑えきれない二人は、晩春の夜、意を決して鉢形城内を流れる深沢川の上流へ出奔した。急に産気づいた錦姫は、そのまま岩の上で出産し、赤子の鳴き声を聞きつけた農婦がかいがかいしく面倒を見てくれた。数日後、二人は厚く礼を言い、どこかへ立ち去って行った。村人はその岩を「稚児岩」と名付けた。また、錦姫はその村に住み、錦を織ることを教えたため「錦入」(現西ノ入)が村の名前になったとも云われている。

根拠文献:「鉢形城跡と郷土文化」「寄居町の歴史」

◆ 小田原市

氏政、氏照の墓

伝承



四代氏政とその弟・氏照の墓所と伝えられている。豊臣秀吉との小田原合戦により、北条氏が降伏すると、当主であった五代・氏直は高野山へと追放され、父・氏政と氏照は現在の小田原市南町にあった田村安齊邸で切腹した。その後、江戸時代後期に、この場所に二人の供養塔が設けられることとなった。ここにお参りすると幸せな出会いがあるといわれ、願いがかなった時、鈴を納めるのが習わしとなっている。

根拠文献:立木望隆「小田原史跡めぐり」ほか

五代 北条氏の夢 潰えし 北条氏直

ほうじょううじなお【1562~1591】

五代氏直は氏政存命中の天正8年(1580)に家督を継承しています。天正10年(1582)には武田氏が滅亡し、次いで織田信長が横死すると、上野、下野(栃木県)方面へ積極的に軍勢を派遣し、北条氏の支配領域は最大に達しました。しかし、小田原合戦の敗北の後、高野山へ追放され、その翌年に亡くなっています。こうして、約100年にわたる戦国大名北条氏による関東支配は終わりを告げます。



鎌倉市

玉縄城主、北条氏勝の活躍 伝承



天正17年(1589)、六代玉縄城主北条氏勝は、豊臣秀吉が小田原征伐に出兵するという知らせがあったので、小田原の北条本家の要請により、箱根の山中城の援軍として出かけた。しかし、山中城は豊臣氏との戦いに敗れ、氏勝は玉縄城に戻って籠城したが、天正18年(1590)に氏勝は、ついに家康の軍に降った。ここに、堅固を誇った玉縄城も家康の前に開城した。

根拠文献：鎌倉市教育委員会「かまくら子ども風土記」

寄居町

女沢(おなさわ) 伝承

鉢形城落城の際、城主北条氏邦の夫人は、子供と腰元らとともに菩提寺である正龍寺へ落ち延びようと、荒川から寺脇の小川へさかのぼっていったといわれ、その低湿地あたりを「おなさわ」と呼んだ。

根拠文献：「鉢形城跡と郷土文化」

車山(くるまやま) 伝承

鉢形城跡の南西約1キロ離れて車山と称する山がある。この山を登ると、鉢形城の曲輪がよく見えることから、「くるわ山」がなまって「車山」になったと言われている。小田原合戦の際前田利家・上杉景勝両将率いる北国軍に包囲され、本多忠勝が指揮して二十八人持ちの石火矢を設置し、鉢形城の大手門を砲撃したと伝えられている。

根拠文献：「鉢形城跡と郷土文化」

大阪狭山市

氏信と田中孫左衛門 伝承 史実

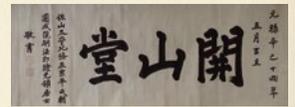


田中孫左衛門は、大坂夏の陣の時、北条家当主氏信の母と兄弟を戦火の中救い出した。大坂の屋敷が焼けた氏信は、田中孫左衛門宅に仮住まいし、孫左衛門の土地を譲り受け狭山の地に陣屋を構える。これが、狭山藩北条氏の始まりである。田中孫左衛門の一族は、明治維新まで狭山藩に仕えた。現在、大阪狭山市池尻には、孫左衛門の子孫で狭山池の池守・狭山藩代官を務めた一族の池守田中家住宅が残る。

根拠文献：「氏朝公日記」「北条氏朝家譜」他

北条氏治と氏朝兄弟 史実

狭山藩北条氏四代の氏治は、早雲寺にある北条五代の墓石を再建し、早雲寺の再興に尽力した。兄の養子となった五代氏朝は、中興の英主とも呼ばれ、伏見奉行など幕府の要職についた。氏朝は、大坂市中にあった、藩祖氏規・初代氏盛の墓を、兄にならって再興するとともに、大阪府堺市に今も残る黄檗宗法雲寺の開山慧極和尚に師事し、堂舎の設営などに尽力した。法雲寺の開山堂には、今も氏朝の認めた扁額が飾られている。



久太郎町と久宝寺町 伝承

大阪市内には、久太郎町という地名がある。これは、狭山藩北条氏の三代氏宗の幼名に由来している。久太郎町は、船場と呼ばれる地区にあり、北条氏規、狭山藩北条氏初代氏盛・二代氏信が屋敷を構えた久宝寺町の真北の筋になる。船場地区は慶長3年(1598)に開発された比較的新しい場所であった。大坂城下には、北条氏が居を構えた名残が今も残る。

寄居町

樋口薬師(ひぐちやくし) 伝承

鉢形城主北条氏邦が衆病を悉く除くために建立した八薬師の一つで、鯛口や十二神将も奉納されている

- 第一 詰りの薬師
- 第二 峰の薬師
- 第三 樋口薬師
- 第四 下平薬師
- 第五 秋山薬師
- 第六 受法院薬師
- 第七 山下薬師
- 第八 鏡(芋堀)薬師



根拠文献：「城外神社仏閣古跡霊場名所記」

食器を借りる話 伝承

大勢が集まる時に、深沢川の「一の淵」に「何人分の椀を貸してください」と書いた紙をいれると、その数が出てきた。ある日、宴会で皿を数枚こわしてしまい、同じような皿を用意して返したところ、それからは何も貸してくれなくなったという。

根拠文献：「鉢形城跡と郷土文化」

賽取左衛門(さいとりざえもん) 伝承



鉢形城の内堀の役割をはたしている深沢川には、深淵があり、「四十八釜」と呼ばれている。その内のひとつ「船釜」の上に賽取左衛門が住んでおり、その美人の奥さんが乙姫の召使であった。急に帰ることになった奥さんの後を追って、竜宮城にたどり着くと、乙姫から名剣水切丸と阿弥陀如来像を譲り受けて、亀の子淵にやってきた。その淵には重い蓋がかけられ、水切丸で斬り開けると、荒川が真っ赤に染まり、そこには大きなアオウミガメの死体があった。

根拠文献：「鉢形城跡と郷土文化」

北条一族

いせしんざえもんもりさだ
■伊勢新左衛門盛定 (P4)

初代早雲の父。備中伊勢氏総領伊勢盛綱の四男で、高越城主。室町幕府奉公衆などを務めた。

ほうじょううじとき
■北条氏時 (P4)

初代早雲の子。初代玉縄城主。

ほうじょうげんあん そうてつ
■北条幻庵(宗哲) (P6)

初代早雲の末子。幼少から箱根権現に入寺した後、三井寺で修業し、北条一の文化人となった。兄・氏綱の逝去後は、三代氏康・四代氏政を後見し、一族の長老的な存在であった。

ほうじょううじてる
■北条氏照 (P10)

天文9年(1540)頃、三代氏康の三男として生まれ、後の武蔵滝山城主、八王子城主となる。天正6年(1578)、御館の乱の際には、兄・氏政の名代として、氏邦と共に弟・景虎を支援。織田信長死去後は、甥・氏直と共に上野に侵攻し、滝川一益を破り領域を拡大。豊臣秀吉の小田原攻めの際は八王子城は重臣に守らせ、自身は小田原城に籠っていたが、八王子城は上杉景勝、前田利家らに攻略され、小田原城開城後は、責を負い兄・氏政と共に切腹した。

ほうじょううじくに
■北条氏邦 (P10)

天文10年(1541)頃、三代氏康の四男として生まれ、後に鉢形城主となる。天正10年(1582)の天正壬午の乱では、神流川での戦いにおいて、甥で当主の氏直を補佐し、滝川一益を壊走させた。天正17年(1589)には宇都宮にも侵攻し、豊臣秀吉の小田原攻めの際には、居城・鉢形城に籠ったが、前田利家らに攻められ降伏。その際一命は許されたが慶長2年(1597)、加賀金沢にて病死。

大阪狭山藩北条氏

小田原北条氏の血統を受け継ぎ、江戸時代を生き抜いた狭山藩北条氏

天正18年(1590)小田原開城後、氏直の高野山謹慎に従った叔父氏規(氏康三男)は、天正19年(1591)赦免される。秀吉旗本となった藩祖氏規は、大阪狭山市西部を含む「槩村(日置荘)」で所領2千石をもつ。文禄元年(1592)肥前名護屋城に在陣し、文禄3年(1594)7千石が増えるが、慶長5年(1600)大坂の屋敷で没する。嫡男の初代氏盛は、氏直と氏規の遺領1万1千石を相続し、大名となる。二代氏信が狭山へ移り陣屋構築に着手し、明治維新まで十二代続く。

ほうじょううじもり
■初代藩主 北条氏盛 (P12)

天正5年(1577)誕生。肥前名護屋に從軍。慶長5年(1600)氏直・氏規の遺領を相続し大名になる。関ヶ原で東軍に属し、慶長13年(1608)大坂で没。

ほうじょううじのぶ
■2代藩主 北条氏信 (P12)

慶長6年(1601)誕生。氏盛嫡男。大坂の陣では江戸城を守る。元和2年(1616)池尻村田中家に住み、陣屋の構築に着手。寛永2年(1625)江戸で没。

ほうじょううじむね
■3代藩主 北条氏宗 (P12)

元和5年(1619)誕生。氏信嫡男。寛永20年(1643)に陣屋(上屋敷)が完成。寛文10年(1670)に致仕(藩主辞職)。貞享2年(1685)江戸で没。

ほうじょううじはる
■4代藩主 北条氏治 (P12)

寛永16年(1611)誕生。氏利(氏信の弟)二男。伊豆願成就院と箱根早雲寺の復興に尽力し、小田原北条五代の墓石を再建。元禄9年(1696)江戸で没。

ほうじょううじとも
■5代藩主 北条氏朝 (P12)

寛文9年(1699)誕生。氏利五男。大坂専念寺に氏規・氏盛の墓石を再建。儉約と人材登用に努め、下屋敷を開設。享保20年(1735)江戸で没。

ほうじょううじゆき
■12代藩主 北条氏恭 (P12)

弘化2年(1845)誕生。堀田正衡の三男。文久元年(1861)継職し、明治2年(1869)版籍奉還。明治天皇侍従を崩御まで務める。大正8年(1919)東京で没。

北条家臣

かのし
■狩野氏 (P3)

平安時代からの豪族、狩野城主。狩野道一は初代早雲の伊豆侵攻の際、約5年間抵抗したのち降伏し、以降、狩野氏は北条家臣として活躍したが、小田原合戦の末、北条氏とともに滅亡した。

かさはらのぶため
■笠原信為 (P6)

備中伊勢氏の家臣であった笠原氏の一族。小机城初代城代となり小机軍団を率いた。後世の資料は信為を「武勇才芸ならびなく和歌の道にも達者なり」と記す。宗瑞とつながり深く、享禄2年(1529)には小机雲松院に「早雲寺殿御茶湯分」を寄進して菩提を弔っている。天文15年(1546)に隠居して嫡子に家督を譲り、弘治3年(1557)7月8日に死去した。

ほうじょうつなしげ
■北条綱成 (P7)

永正12年(1515)、今川氏家臣の福島正成の子として生まれ、正成死後は、二代氏綱の保護を受け、北条姓を与えられたという。氏綱の子である北条為昌の養子となり、為昌死後に玉縄城主となった。天文6年(1537)から上杉家との戦いをはじめ、各地を転戦し、天文15年(1546)の河越合戦では、半年余り籠城戦で耐え抜き、北条軍を勝利に導いた。その後も、北条家随一の猛将として活躍したが、三代氏康が病死すると、家督を氏繁に譲り、道感と号した。天正15年(1587)病死。

ほうじょうつなふさ
■北条綱房 (P7)

北条綱成の弟。父の死後、兄妹とともに北条家に身を寄せ、弁千代と名乗っていたが、二代氏綱により偏諱を受け綱房と称したという。河越合戦では、兄綱成とともに活躍したとされる。

まみややすしとし
■間宮康俊 (P8)

玉繩衆として北条綱成の与力を務める。小田原攻めの際には、山中城主・松田康長の補佐として守備にあたった。袋崎出丸にて200を率い奮戦し、一柳直末を討ち取るなどしたが、豊臣方の猛攻を受けて、1590年討死。

まつだやすなが
■松田康長 (P8)

松田憲秀の従兄弟にあたり、三代氏康から五代氏直までの三代に仕えた家臣。天正15年(1587)、豊臣氏との戦に備えて山中城の構築にあたり、小田原合戦時には、山中城主となったが、落城し討死した。

はがうじつぐ
■珣和氏統 (P9)

北条氏の根本被官で、武田氏の駿河国侵攻の際、駿河興国寺城城主に任命された。氏統自身も太刀を振るって最後まで城を死守したことから、四代氏政から感状が与えられた。

かじわらびぜんのかみ
■梶原備前守 (P9)

紀伊国の出身で交易商人の一面ももつが、水軍の指揮にも長けていたことから北条氏の水軍大将として迎えられた。東京湾での里見氏との戦いや駿河湾での武田氏との戦いでは大きな戦果を挙げ、豊臣氏との戦いでは西伊豆防衛の任にあたった。戦後は帰国したが、紀伊国高野山に追放された北条氏直に対し、新年の挨拶を送っている。

ほうじょううじかつ
■北条氏勝 (P11)

北条氏繁(北条綱成の子)の次男で、玉縄城主。母は三代氏康の娘の新光院殿。小田原合戦の際には山中城に在城したが、落城後は玉縄城に帰還。合戦後は徳川家康に仕え、下総岩富領1万石を与えられた。

※(PO)は初登場ページ数

EVENT CALENDAR ————【イベントカレンダー】

北条氏ゆかりの地では各地の特色や歴史的背景に基づいた北条氏に関連するイベントを開催しています。



◆井原市

イベント名	場所	日程
北条早雲まつり	高越城址周辺	4月第3日曜日

◆相模原市

イベント名	場所	日程
津久井城まつり	県立津久井湖城山公園	3月上旬
津久井城開城記念の日	県立津久井湖城山公園	6月下旬
津久井城キャスリング	県立津久井湖城山公園	年3回

◆小田原市

イベント名	場所	日程
小田原北條五代祭り	小田原城址公園及びその周辺	5月3日
一夜城まつり	石垣山一夜城	10月中旬

◆八王子市

イベント名	場所	日程
滝山城跡桜まつり	滝山城跡	4月上旬
八王子城跡まつり	八王子城跡	6月末
八王子流鏝馬	片倉つどいの森公園	9月末
北条氏照まつり	元八王子町	10月末

◆寄居町

イベント名	場所	日程
寄居北條まつり	市街地通り及び玉淀河原	5月中旬

※日程等詳細は各ホームページ等にて掲載

【北条五代観光推進協議会】

- 岡山県井原市観光交流課
- 井原市観光協会
- 大阪府大阪狭山市産業振興・魅力創出グループ
- NPO法人沼津観光協会
- 静岡県沼津市観光戦略課
- (一社)三島市観光協会
- 静岡県三島市商工観光課
- (一社)伊豆市観光協会
- 静岡県伊豆市観光商工課
- (一社)伊豆の国市観光協会
- 静岡県伊豆の国市観光課
- 港北観光協会
- 神奈川県横浜市港北区地域振興課
- (公社)相模原市観光協会
- 神奈川県相模原市津久井まちづくりセンター
- (公社)鎌倉市観光協会
- 神奈川県鎌倉市観光課
- (一社)小田原市観光協会
- 神奈川県小田原市観光課
- (一財)箱根町観光協会(箱根DMO)
- 神奈川県箱根町観光課
- (公社)八王子観光コンベンション協会
- 東京都八王子市観光課
- (公社)小江戸川越観光協会
- 埼玉県川越市観光課
- 寄居町観光協会
- 埼玉県寄居町商工観光課